

市民参加の都市づくり

The Future of London

Edward Carter

「都市はただ単にコンクリート、鉄鋼、アスファルトのかたまりではない。そこは何千何百万という人びとが生まれ、育ち、年老いて死んでいくところである。」

しかるにわれわれの生活の質は悲劇的に悪化してきた。それは今や加速度を増しつつある。無計画なカオスの進行は一年ごと処置しにくくなっている。このように一刻のゆるよもできぬ状態に追い込まれながら、今なおプランの効果的实施にふみきれない。この最大の原因はいったいなんだろうか。それは都市計画そのものに市民が参加していないからだと著者は主張する。これまでのプランはすべて、都市計画家、政治家、役人、資本家によるものであり、市民はつんぼさじきにおかれていたか、もしくはほんの形式的に発表されただけであった。

その結果1940年代の生氣あふれるロンドンの都市計画および関係法は、戦後の工業化都市化のすう勢におしきられてしだいに骨抜きにされ、輝やかしいビジョンも色あせてしまう運命をたどったとする。さらに現在ではロンドン市民の都市計画に対する無関心あるいは懐疑が計画実現の大きな障害になっており、市民ひとりひとりの参加なくしては、ロンドンの未来を築く創造的大事業はおぼつかないことを強調し、そのためにはまず、都市計画が市民の日常生活の次元で理解され討論できるという形でロンドン市民全体に提示されなければならない。この本はこのような問題意識にたって市民を対象にロンドンの都市計画とそのあるべき姿を描きだそうとしたものである。それゆえともすればフィジカル、あるいはテクニカルで無味乾燥な叙述に流れがなな都市計画書のなかで、社会的、歴史的側面から充分検討を加えた密度の高いものとなっている。

内容は、はじめにロンドンが行きづまって危機に頻している実態を克明に訴え、さらに現在までの都市計画の紹介と批判がなされ、ロンドンの未来への展望および住民の生活のパターンを決定する住宅、人口、オープンスペースなどについて写真、スケッチをふんだんにもりこみながら平易にしかも生き生きと論じている。著者の主たる関心は都市再開発に向けられている。今日この都市再開発には「都心の改造」と「周辺の発展」の二つの方向が考えられるが、この本では主として前者、すなわちロンドン中心市街地の再開発が急務であると主張する。かつてのハワードをはじめとする田園都市運動は、この都心再開発の問題から注意をそらすことに効果的であったとし、さらに現在脚光をあびているニュータウンも都心の過密化の速度をとめはしないと強調し、これまでの都市計画のほとんどがロンドン都心の再開発から逃避していることをついでに。またリージョンへのオフィス分散などもいたずらに都市の機能をぼう張させる心配がないとはいえず、都心再開発という観点からオフィス分散のパターンが明確にされなければならないと警告している。

横浜市でも新しい都市づくりの構想がねられている。「だれでも住みたくなる都市づくり」の第1歩は、まさにこの都市づくりのためのプランが市民の手によってつくりあげられることにほかならない。この都市計画の大衆化によって世論が熟するとき、はじめて新しい横浜の都市づくりの展望が開けてくる。

<Pelican Original 200ページ> (S)

あ と が き

本誌の性格について一言。「調査季報」は、市政をよりよくするために、市職員と市民が互に討論し、交流しあう場です。そのために、市政に関するすぐれた研究・調査・意見を広く紹介したいと考えています。したがって、本誌は掲載される論文は、あくまで個人の主体と責任においてなされるものです。どうか、自由かつ創造的な意見の発表の場として本誌をみんなで育ててください。 <N>

調査季報 ⑦

1965年 5月31日

編集・発行 横浜市総務局調査室

横浜市中区港町1-1

印刷 有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22